

# 『信仰とテロリズム』縁の地を訪ねて

加藤 弘和

昨年の春、拙訳『信仰とテロリズム』（著者アントニア・フレイザー、原題『火薬陰謀事件 一六〇五年のテロと信仰』）を慶應義塾大学出版会から出版していただけたことは大きな喜びであった。実は出版以前にいろいろと確認しておきたい点があり、一昨年の夏にイギリスに行く計画をたてていたが、仕事の関係上それが不可能になり、すでに出版後ではあるが昨年九月に入つてすぐ半月ほど、さらに今年も九月一日から九泊十日（機中一泊）、イギリスにでかけた。原著に書かれていることで確認したい事柄だけでなく、実際に見てみたいと思つて

いた建物などが多々あつたからである。以下は資料収集のための海外主張のおおまかな報告書である。ちなみに火薬陰謀事件とは、一六〇五年にジェイムズ一世治下で当時抑圧されていたカトリック教徒のごく一部、しかも

そのほとんどが姻戚関係にある総勢十三人の若者が、抑圧の元凶とみなした議會を火薬によつて爆破しようとしたが、未遂に終わった事件である。（東北公益文科大学総合研究論集Ⅰに寄稿した『火薬陰謀事件』または『ガイ・フォークス・デイ』をめぐつて』を参照いただければ幸いである。）

（Ⅰ）二〇〇三年九月

オックスフォードにて

ヒースロー空港に到着した夕方、ただちにオックスフォードに向かい、かつて何度か長期滞在した折に将来一度は泊まつてみたいものだと思つていたホテルに投宿

した。翌日の午前中に早速大学の図書館、ボドリアン・ライブラリーにおもむいた。火薬陰謀事件において、事件を阻止しようとしたにもかかわらず、イエズス会をつぶそうとする政府側の断固とした方針によって処刑された会長ヘンリー・ガーネットが書いた「曖昧表現使用論」の四折原本に当たってみたかったからである。身分を証明する書類を持参したが、今回は事務所に行つて特別書庫に入るための手続きをしなければならなかった。だが、驚いたことに、過去におけるオックスフォード大学での小生の記録がコンピューター処理・保存されており、なんの問題もなくその場で顔写真入りの入庫証を作つてもらえた。それを持つて貴重な資料が収められている書庫に行き、原本を注文し、午後一時に戻ることにして外に出た。

その間に訪れたのは、大学最古のコレッジのひとつであり、西脇順三郎が留学したニュー・コレッジである。そこに掛けられていると原著に書かれている彩色銅版画「パピストの火薬反逆」を見るためである。ところがコレッジの職員三、四人に訊き調べてももらつたが所在が

わからず、最後には旅行案内所に行けばこうした情報は得られるかもしれないと言われ、すくなくらず落胆する。夏の休暇中のことであり、わかる人がいなかったのだ。昼食の後ボドリアンに戻ると、注文しておいた原本が用意されていた。四百年以上も前に羊皮紙に書かれたものだ。僅か三十二、三ページのものであるが、十章からなり、各章のタイトルは読みとれるが本文の文字はなかなか読みにくい。原著にあるとおり、サー・エドワード・コーク（事件の裁判における検事）の書き込みははつきり読める。彼の署名は多少きざな感じがするとも言つておかうか。稀書なり重要な原稿を傷めないように、スポンジ製の書見台が用意されている。複雑な感慨にひたりながら読みふけた。ところで銅版画については、旅行案内所に行くところの図書館に行けばわかるかもしれないと教えられる。たしかにそこには各コレッジの歴史や所蔵品などに関する著作が数多く集められており、司書もあれこれ調べてくれたが、結局なんの情報も得ることが出来なかった。

## ヒンドリップ・ハウスにて

原著に、カトリック教徒たちが隠れた秘密の場所が今でもいくつも見られると書かれており、その一つでも見てみたいというのが今回の旅行目的の一つであつた。どこよりもガーネットが最後に逮捕されたヒンドリップ・ハウスを見たいと思つていた。列車やバスで行くのは不可能と判断し、オックスフォードで車を借り、途中チピング・キャムデンで一泊した。翌日、ウスター市を抜け畑のなかを走つていくと、「西マーシア警察本部」という標識が目にとまつた。思わず興奮する。原著に、ヒンドリップ・ハウスは現在マーシア警察本部が使つていと書かれているからだ。丘を登つていくと白い大きな建物がたつてゐる。すっかり建て替えられてはいるが、当時逃げ道として使われた地下道の入口が地下室に残つてゐた。それは広い庭の下を通り、丘の斜面に出口がつくられてゐた。案内してくれた若い警察官は、わざわざ大きな懐中電灯を本部まで取りに行き、この出口から中を照らして見せてくれた。天井は低い、石造りの堅牢なものだつた。今ここを訪れる人は少ないのだろうが、出

口にはトタン板がかぶされ、そのうえに赤いヴィニール製の網がかけられ、落ち葉が散らばつてゐた。建物は周囲が遠くまで見渡せるように、丘の上にたてられてゐた。捜索隊が近づいてきた場合に備えての用心である。建物のすぐ近くに教会がたつてゐる。現在英国国教会の所有になつており、会議が音楽の練習をしたような跡が残つていたので、あまり注意して中を見てまわらなかつたことが今でも悔やまれる。事件関係者の遺品が保存されてゐるかもしれないではないか。青空が広がつたかと思うと、にわか雨も降るという変化の激しい一日だつた。

## ヨークにて

つぎに、事件の象徴的な人物とみなされているガイ・フォークスの生誕地ヨークに列車で出かけた。生家が現在かの有名な書店ブラックウェルになつており、「火薬陰謀事件で有名なガイ・フォークスの両親はこの辺りに住んでゐた」という銘板が入口にかかつてゐる、と原著に書かれてゐる。市の中心の観光客でにぎわう通りにそれはあつた。しかし、たしかに本屋ではあるが、ブック

セイルというつまらない店だった。

ヨークはローマの遺跡が残り、大聖堂ヨーク・ミンスターが聳え立つ美しい町として知られ、かねがね訪れたいと思いつながら、果たせないで来たところでもあった。この大聖堂と道をはさんですぐのところにな小さな教会があった。ここも英国国教会となっており、名前を確かめず、中に入ってみることにすらしなかった。ところが、その夜訳書をめくっているうちに、そこはガイ・フォークスが洗礼を受けた場所ではないかと思いついた。翌朝早くそこへ出かけてみると、はたして銘板に「ガイ・フォークスは一五七〇年四月十六日にここで洗礼を受けた」と書かれていた。しかし、残念ながら扉が閉まっております、時間的余裕もなくその場を立ち去るしかなかった。なんと迂闊であつたことか。

## ロンドンにて

ロンドン滞在は三泊四日、正味二日であつたが、九月中旬とは思えない暖かい、というよりも暑いと感じられるほどの快晴に恵まれた。ついた翌日、何点か確認した

いことがあつて議会に出かけた。しかし、ちょうど開会中であり、中に入ることはできなかった。そこですぐ傍らのジュエル・ハウスによつてみた。その展示品のために、十七世紀ごろのウエストミンスター周辺の様子うかがい知ることのできる資料があればという期待からだったが、とくに目指す資料は見つからなかった。

ウエストミンスター寺院では、ジェイムズ一世の幼くして亡くなった二人の王女の棺を見たいと思つた。原著では、ふたりはヘンリー七世の棺のそばに安置されていると書かれている。だが実際には、エリザベス一世の棺とおなじ一角の奥に置かれていた。しかも、大変驚いたことに、きわめて皮肉なことだが、エリザベス一世の棺は、それは豪華なものであり、メアリー一世の棺のうえに配置されている。皮肉なことといつたのは、メアリー一世は、ヘンリー八世と最初の妃キャサリンとのあいだの唯一の子供であり、母の遺志をついでカトリック教徒として君臨し、プロテスタントを迫害したが、エリザベス一世は、ヘンリー八世がキャサリンと離婚して再婚したアン・ブリンとのあいだで生まれた一人子であり、カ

トリック教徒への規制を強め、火薬陰謀事件がおこる下地を作ったからである。寺院内を興味深く見てまわったのは、今回がはじめてであった。

ロンドン塔では、事件関係者で塔に幽閉されていたもののうち二人が、処刑されるまでのつれづれに部屋の壁に自分の名前を刻んだそうだが、それらが見られるものかどうか気になっていた。案内人に問うと、そのうちの一人の署名が彫られている場所を教えてくださいました。名前のおかげにガラス板がはめ込まれ、それに光が反射して見にくかったとはいえ、保護のためだと分る。火薬陰謀事件と直接関係はないが、姦通罪で処刑されたアン・プリンが埋葬されている礼拝堂にも、今回は入ってみることができた。

ヨークからロンドンに向かうまえに、かなり回り道ではあるが休息のため湖水地方にたち寄り、ワーズワースの記念館ほかを訪れた。ぜひとも将来のんびりとトレッキングでも楽しみたいものだ、との思いを強くしたのだった。

## (2) 二〇〇四年九月

この夏にも『信仰とテロリズム』縁の地を訪ね資料を収集する旅にでかけた。まず昨年同様オックスフォードで二泊。とはいえ実際に使えるのは一日だけだが、この一日のうちに車を借りる手はずを整え、日本で手に入らなかった本を探し、長年の友人、知人に会ったりと忙しくも楽しい時を過ごした。オックスフォードを出発点としたのは、目的地がたまたまそこから比較的近いところに点在していたからだ。三日目の昼近く車を借り、午後早くホテルを出て、コートン・コートに向かう。昨年出かけたヒンドリップからほぼ真東に直線距離二十キロほどのところにある。ここはガーネット神父によって事件前最後の諸聖徒日が祝われたところである。その一部には、今でもスロッキモートン家の子孫が暮らしているが、他の部分はナショナル・トラストの所有になっている。建物も庭も広大なところだ。「司祭の穴」と呼ばれるカトリック教徒の隠れ場所が一箇所見られるようになって

いる。その夜はウォリックに泊まる。

翌日最初にバディズリィ・クリントンに出かける。ガイネットに献身的に仕えたアン・ヴォークスが司祭たちをかくまうために借りた家のひとつであり、これまたナシヨナル・トラストの所有になっている。午後にならないと見学できないというので、事件の首謀者ケイツビーが生まれたとされるラプワースまで行つて（結局その家は見つからなかったが）、引き返す。いかにも住み心地のよさそうなたたずまいの家であり、庭も訪れるものを慰めてくれる。ここでも「司祭の穴」を二ないし三箇所見ることができた。そのあと、ケニルワース城の廃墟で一休みし、ダンチャーチに行き、陰謀者たちが最後に集結した、チューダー様式のレッド・ライオン・イン（訳書では「ライオン」が脱落している）を探しだす。そこは個人宅になっているが、「ガイ・フォークスの家」と呼ばれ、その由来を記した銘板が壁にかけられていた。さらに、ケイツビーが母親と暮らしたアシュビィ・セント・レジャーズに行つた。陰謀計画を練つたとされる門番小屋は修理中で、足場が組まれていた。ここも個人の

所有である。そろそろ日没の八時に近くなつたこともあり、傍らにあるという教会に入つてみるのを忘れてしまった。教会には見放されていたようだ。その夜はノーサンプトンで宿を探すつもりだったが、適当なところが見つからず、ウェリングバラまで直行する。粗末なホテルに落ち着いたのは、すっかり日も暮れた九時ごろだった。

翌日、アンの義妹イライザ・ヴォークスが司祭をかくまうために義父を追い出したといわれるハロウデンに出かける。原著に現在ではウェリングバラ・ゴルフ・クラブになっているとあるとおり、多くの人がゴルフを楽しんでいたが、家のなかも庭も自由に見せてもらえた。建物は装飾性の乏しい単純な立方体といった趣のものだが、庭は、そのはずれには小さな湖もあり、美しい。つぎに目指したのは、トリリーシャム家のラシュトン・ホールとトライアングラー・ロッジである。道を間違えロッジに先に行くことになる。名前のとおり三角形をし、三という数字にこだわった、想像していたよりもはるかに小さな建物が、畑の真ん中にぽつんと立っていた。レンガ

を組み合わせたような感じの石造りであり、一辺の長さはせいぜい十メートル前後であり、半地下の階をふくめて三階建てだった。番人が独りいるだけで訪れる人もなく、建物の中には何もなかった。そこから遠く木々のあいだにラシュトン・ホールが姿をみせていた。いまは王立全国盲人学校となつている建物を見に行くと、結婚式の準備でその日は中を見せられないと言われ、門の鉄格子をとおして建物自体を隠している木々の写真を撮るだけで満足せざるをえなかった。

翌日午前中にオックスフォードで車を返さなくてはならず、その夜はそこから出来るだけ近いところに泊まることにした。一日にどれほどの距離を走れるか、およその見当をつけ、宿泊地を考えていたが、ホテルの予約をしておらず、宿探しに苦労した三泊四日のドライブだった。毎晩土地の人の助けをかりることになった。目的地にたどり着くのにも多くの人々のお世話になったことは大書しておきたい。車で先導してくれた人もいた。ともかく四日目の午前中に無事オックスフォードに戻ることができ、その日の午後は、最初に泊まり予約してお

いたホテルに落ち着いた。しばらく昼寝をし、シャワーを浴びてから、ほど近いなじみのチャーウェル川のほとりに散策に出かけ、ボートハウスの岸辺に腰をおろして、パンティングを楽しむ人々を眺めたりして疲れを癒すことができた。

そのあとロンドンに二泊。オックスフォードから移動した翌日に議会に足を運んだ。今回は一時間ほど並んだすえ中に入り、上下両院での法案審議の様子を傍聴席から見ることもできたし、賛成票と反対票を投じるそれぞれ別のロビーが存在することを確認できたが、そこに入ってみることは残念ながらできなかった。ここでも本屋を訪ねて歩き、探していた本四冊のうち三冊を見つけたことができた。

今回訪ねていった場所は、事件に関係する主要な場所をほとんど網羅している。それらはオックスフォードを要にして扇の弧線上に位置している。オックスフォードからコートン・コートまで約八十キロ、ラシュトンからオックスフォードまで約百キロである。これに対して、以下はすべて地図上の直線距離であるが、コートン・コー

トからバディズリイ・クリントンまで北東へ十八キロ、バディズリイ・クリントンからアシュビー・セント・レジャーズまでほぼ真東に三十六キロ、さらにそこからラシュトンまで北東へ三十キロ、ハロウデンにもほぼ真東に三十六キロであり、ラシュトンとハロウデンとは十キロほどしか離れていない。馬が最速の交通手段であった当時においても、比較的楽に行き来できた距離であったろうことが実感できた。（もつとも、小生自身について言えば、異国の不慣れな高速道路を行きすぎて引き返したりしながら、よくもこれだけの箇所をめぐり無事に帰れたものだ、と安堵しているというのが正直なところであるが。）二回の旅で、綿密な計画にもかかわらず残念ながら見落としてはあるが、見たいと思ったところはほぼ見てまわることができた。実際に訪ねていってみると、図版から受ける印象とはだいぶ違うところもあることが分ったが、それにしても、どこも往時の面影をたつぷり残していることに驚く。今年も天気恵まれ、肌寒いと感じたのは一タだけで、つよい陽射しが、いずれの場所からも悲劇性を和らげているかのように感じられた。集

めた資料の整理はこれからである。

なぜ火薬陰謀事件にこれほどまで拘るのだろうか。それだけの要素が事件そのものにあるのではないだろうか。あるいは、原著の記述、登場人物がその気にさせるのかもしれない。イギリスに発せられる直前にロシアの飛行機が二機、テロリストによって爆破・墜落させられ、滞在中には北オセチアの学校で三百人をこえるひとが犠牲になり、イラクではあい変わらず日々多くの死者がでている。こうした状況によって、テロについて考えざるをえない心境に無意識のうちに追い込まれているからなのか。ロンドンでは、地下鉄がきれいになった、警備員らしき人が多く駅構内に配置されている、との印象を受けた。テロを警戒することであろう。

(二〇〇四・九・二十三)